

Q

12

卵巣予備能検査とは どのような検査なのでしょうか

A

卵巣予備能とは、卵巣に残る卵胞(卵子)の数を指します。妊娠率の高さを直接示すものではありませんが、採卵時に採取される卵子の数などを反映するため、治療法を選択するうえでひとつの指標となります。一般的には、年齢・ホルモン検査・卵巣予備能検査などを考慮して、治療法を選択することになります。体外受精においては、採卵数を増やすために、卵巣刺激剤(排卵誘発剤)を使って複数の卵胞を发育させる「卵巣刺激法」が広く行われています。卵巣刺激剤には注射製剤(ゴナドトロピン製剤)や経口で内服する製剤がありますが、卵巣予備能検査はそれらの薬剤の種類や量などの使い方を考えるうえでの指標となります。

7章

生殖補助医療について

卵巣予備能検査の種類

胞状卵胞数検査(antral follicle count:AFC)

胞状卵胞とは、グラーフ卵胞または成長卵胞とも呼ばれ、发育の可能性が高い(約2~10mm)の卵胞です。月経中に、超音波検査により卵巣内にある胞状卵胞の数(AFC)を調べます。

抗ミュラー管ホルモン検査(anti-Müllerian hormone:AMH)

受精前の卵子は、顆粒膜という細胞に取り囲まれています。顆粒膜から分泌されるAMHというタンパク質の数値を調べることで、成長する可能性のある卵胞がどの位存在するのか推定することができます。測定は6ヶ月~1年ごとが望ましいとされています。血液検査で測定できるため、月経周期に関係なく検査が可能です。

生殖補助医療は治療自体の身体的負担、頻回な通院、経済的負担など女性にさまざまな負担がかかる治療です。採卵をできるだけ効率よく行うために、卵巣刺激を行う前の指標として卵巣予備能検査を行います。卵巣予備能検査によりゴナドトロピン製剤の投与量を調整して卵巣刺激を適切に行うと、反応不良による採卵キャンセルや反応過剰による卵巣過剰刺激症候群(OHSS)などの発生率を下げるすることができます。

【参照生殖医療ガイドライン CQ】

CQ6：体外受精法の卵巣刺激における注意点は？(刺激前検査・前処置) 卵巣予備能の評価は卵巣刺激におけるゴナドトロピン製剤の量の選択に有効か？